

第35回

混声四部合唱の曲を歌う ～楽しく歌おう (7)～

学習のねらい

混声四部合唱の魅力を味わいながら歌っていきましょう。合唱は多人数で声を合わせて歌いますが、全員で1つのメロディーを歌う斉唱とは違います。今回は大木惇夫作詞、佐藤真作曲の「大地讃頌」を歌います。まず、自分の声がソプラノ、アルト、テノール、バス（ベース）のどのパートに適しているかを知ることです。そして、1人で歌うときは異なった練習を行います。男声女声の4つのパートが美しく響き合うためには、どのようなことを気をつけて歌ったらよいかを学んでいきます。



講師
馬淵明彦

合唱の種類と形

混声合唱の魅力は、自分の声がほかの人の声と混ざり合って美しく響き合うところにあります。それを実現するためには、他声部の声を聴きながら自分の声を合わせていくことが重要です。そのための練習として、パート内の音程、リズム、音質をあわせ、さらに4つのパートで和音をつくる練習が大切となります。ぜひ美しい響きをつくって混声合唱の魅力を味わってください。

呼吸法・発声・パートごとの練習

2つの声部を複数の人で歌う合唱を二部合唱、3つの声部では三部合唱、4つの声部だと四部合唱と言います。子どもが歌う児童合唱、男声だけで歌う男声合唱、女声だけで歌う女声合唱、そして男女混合の混声合唱があり、標準的な混声四部合唱では、ソプラノ、アルト、テノール、バス（ベース）で構成されます。また広く演奏されているのはピアノ伴奏による合唱ですが、オーケストラの伴奏で歌われたり、無伴奏による合唱もあります。

では、各パートの音域と音質についてですが、ソプラノは高い音を受け持ち「大地讃頌」の場合、鍵盤の中央のドより1オクターブ上のさらにその上にあるソ#の音を歌います。音質は明るい感じですが、

アルトは幅のある少し太い感じの声で、中央のドより低いラ#が出てきます。テノールは明るい音質で、高いファ#を歌い、ベースは低いドよりさらに低いファ#の音まで出し、幅のあるどっしりした感じの声です。これをヒントに自分はどのパートに適した声なのかを確かめてください。

発声法その6として、大久保混声合唱団の皆さんと一緒に、今まで行ってきた練習の中から「リップロール」とドミソラソミドの音型で半音ずつ高くしながら声を出してノドの準備をしましょう。

「大地讃頌」を歌う

「大地讃頌」は、1962年に作曲された混声四部合唱と管弦楽のためのカンタータ『土の歌』の最後の第7章です。第1楽章は「農夫と土」、第2楽章「祖国の土」、第3楽章「死の灰」と第4楽章「もぐらもち」では原爆と人間について語られ、第5楽章「天地の怒り」、第6楽章「地上の祈り」、そして最後の第7楽章「大地讃頌」では、この大地に限りない祈りを捧げ、全体を締めくくる讃歌となっています。

では各声部の練習を行いましょ。ソプラノは高い声をクリアに出してメロディーを美しく歌うようにするために、息漏れした声や固い声にならないように気をつけます。アルトは和音の中の大事な役割を担うことが多いので、音程を正確に歌うことが求められます。しかしそれだけに、やりがいのあるパートです。テノールは、この曲の場合、音程を取るのが大変難しいので、まず自分のメロディーがしっかり歌えるように練習しましょう。それからピアノなどで和音を鳴らしながら歌ったりした後に、ほかの声部と合わせてみましょう。難しいところはあきらめなくて繰り返し練習します。音を取れるようになって声を合わせる喜びを感じられるようになるとういでしょう。バス（ベース）は主に和音を支える基本の音が多いパートです。

バス（ベース）の音の上にはほかの三声部が和音を響かせますから、バス（ベース）は目立つことなく全体の和音がきれいに聞こえるように、そして全体を支えるように歌いましょう。

ワードファイル

カンタータ (Cantata) : 語源はイタリア語のカンターレ (Cantare) (歌う) で、器楽曲のソナタに対応する音楽の形式です。17~18世紀バロック時代に発展した声楽曲で、独唱・重唱・合唱および器楽伴奏からできていて、歌詞の内容によって世俗カンタータと教会カンタータとに分かれます。

歌唱形式 : 独唱、斉唱、重唱 (1人が一声部を受け持つ)、合唱、応唱 (独唱と合唱)、交唱 (複合唱: 複数のグループが互いに掛け合いする) などの種類があります。